

# 絵本と子どものイメージ



清水エミ子

四十三年四月一年保育八十名二学級、小学校の校庭の敷地内でスタートした。

開園第一年目のため、教材教具が不備のままスタートしたのだ。(最小限度の教材教具から)

予算の関係もあり、思うように教材教具を購入することがゆるされなかった。しかし、新しい施設、設備をフルに利用して、子どもたちは元気に毎日をすごしていた。

そんな五月のある日のことです。

たねまきをした子どもたちは、ジョロがまだ買ってないため、(わざとジョロを先にととのえなかった)手の平で水をくんでまいたり、空かんで水をまいたりしていた。

友だちと知恵を出し合って、空カンの底にくぎで穴をあけ、カンのジョロをつくって水まきをした。

その日のおべんどうのあと、古い「よいこのくに」五月号の絵本をみていた男児が、

(ちゅうりつぶの花だんにちょうちよがとんでいる絵をみながら)

「このきれいなちゅうりつぶは、たくさん たくさん 水をもらって大きくなりました」

「ちょうちよは、おみずのあじは、どんなあじですか。あたしものみたかったな、といってちかよってきました」と、いともたのしそうに、絵読みを声を出してしているのです。

私が近づいて「たのしいおはなしね」というと、「そうなの」とまたくり返して話してくれたのです。

でも、絵本には、

「はるです ちょうちよは ひらひら」

と書いてあるのです。

この男の子は、字がまだ読めなかったのです。

私はこの時、あまりにも、書いてあるおはなしと、子どもが自由に絵をみて話していることのちがいに、おどろいたのです。

こんなことに気付いて、数少ない絵本と、子どもたちの関係をみつめてみたのです。

○字の読める子ども と 絵本のみかた

○字の読めない子ども と 絵本のみかた

字の読める子どもは、絵をたのしんで読む余裕もたず、字を一字一字一生けんめいに読み、読み終わったあとに、もう一度、さらりと絵に目を向ける程度なのです。

「これが、わしだってさ、うみをとんでいくんだってさ」と、書いてあることがらしか、イメージがないようです。

字の読めない子どもは、まず、絵をたのしんで、じっとみえます。くびを曲げたり、画面をなでまわしたり、次の頁との関係のをぞいたりしながら、まず、ゆっくりと絵をみています。

そして、自分のイメージのままに、絵を読みとり、絵を手がかりに、物語の世界に入り込んで行きます。

ある子どもは、ことばに出して話し出し、ある子どもは、ひと

りで、いつまでもみているというような、ちがいをみつけたのです。

字が読める子どもが全部、イメージが貧弱だと言い切ることには、まだまだできません。

しかし、私のごく少ないデータでは、そのような傾向がみられるのです。

こんな子どもたちをみていて、私は、

○理屈を先に知らせるのでなく、感じる心を育てたい。

○感じて、素直に、感動するよろこびを知らせたい。

そして感動して、いろいろイメージを豊かにすることによって、物事を正しく認識していくようになるのではないかと、つくづく感じたのです。

現代の子どもたちは、あまりにも、知識のつめこみにはしりすぎ、物知りになりすぎていると思うのです。

感じる、感動するよろこびを知らせ、イメージするたのしみの中から、創造してゆくよろこびをつかみとらせ、物事を多面的に正しくつかみとっていくことのできる子どもにしたいと思うのです。

そこで、私に問題をなげかけてくれた絵本（イメージを助けてくれる身近な物として）を手がかりに、子どもたちのたのしいイ

イメージと創造の世界の広がりを見つめていきたいと考えたのです。

1、おとなの考える物語と、子どもの感じる物語のちがひ、  
2、いろいろな絵のスタイルと幼児のイメージの広がりや深まり  
の関係、

などをみつめながら、幼児に与える絵本のあり方と、絵のもっている価値を正しくみつつけさせるための、絵本の選び方と、与え方をさぐりあてたいと考え、次のことをこころみはじめたのです。

四、五月の子どもの状態を見つめて、ことばのリズムを見出した。

① 外見活発に見えるが、衝動的な行動をする子が目立った。

② 行動が、無反応な子が目立った。

③ おとなっぽい(理屈やの子)子と、幼すぎる子の差の激しいことに気付いた。

④ 進んではなしをしようとしないうちの子がいるなどの問題を発見した。

その上、これらの傾向の子どもたちの発することばに、それぞれ特徴のあるリズムのあることに気付いた。

①の衝動的な行動をとりやすい子どもたちも、「おーい、おい」「こいよ、こいってば」「こっちだぞー」という、ことばのリズ

ムに加えて、長期に怪我をして欠席している友だちに対してなど、また友だちを呼ぶときなども、

あきらちゃん

おびょうきなおして

ようちえんにきてね

みんなといっしょに

おべんとたべよ

あきらちゃん

おびょうきなおして

ようちえんにきてね

みんなといっしょに

えんそくいこう

と、思いやりのある、たのしいうたをつくって、うたったりしているのです。

あめあめやんどくれ

あしたのえんそく いかれな

ゆうやけゆうやけなつとくれ

おひさま ぴかぴか

おひさま かくれて

おひさま かくれて

(あきら)

おひさま　べそかき　あめ　ぎあぎあ

(まこと)

など、友だちとはなしながら口ずさんだり、クレヨンで絵を描きながら、口ずさんだりしているのです。

このように、うたうことをたのしむ子どもたちは、友だちの語りかけや、一枚の広告の紙からも、たのしい呼びかけを感じとることができることがわかったのです。

「先生、この広告の人のかおみてよ、やあ、こんにちわっていつてるみたいだね」

(あきら)

「ちがうよ、きみが、はさみもってきて、切るってわかったから、切らないでちょうだいってたのんでるかおだよ」

(まこと)

赤一色の大売り出しの広告の紙で、こんなたのしい話もできるのです。

この時私は、ちがう広告の紙をもってきてそばにそっとおきました。

「あたしもなかまに入れてよ」

(みれこ)

広告をおいただけでも物語的な話のはこびになっていったのです。理屈やの子どもたちに、同じ広告をみせてみました。

「これ、売り出しの知らせだ。先生、いくらやすいつて書いてあるんでしょ」

「地図かいてないね、どこだかわからないじゃないか」といいながら、ひらがなをひろいよみはじめたのです。

こんなことから、字のよめない子の絵読みのすばらしさを感じます。

進んで話をしない子どもたちも、自由な活動(好きなあそび)をしている時は、適当に友だちと話をしていることがわかったのです。

「これ、どうする」

「あッ、やあよー」

「だめだめそんなことしちゃ」

「ギヤギヤギヤのギヤー」

「わーい、おそとにいこーっど!」

「あんた、それでいいと思うの」

「ヒャー、たくさんあつまってるね」

「はい、これこれこれ、だめ!」

というように、断片的なことばを、ものすごく発していることがわかりました。

そして、その断片なことばにリズムがあるのです。

これは、一週間、自由にあそんでいる時のことばの記録の一部

分です。

この、ことばの記録から気付いたことは、子どもたちは、友だちとの交わりの中で、ことばのもつリズムの感じで、わかりあってしまっていることが、はっきりわかったのです。

「ほら、あれあれ」と言っただけで、あれがどうしたいか、どうなったのがわかってしまうのです。

ふだん、あまり交わっていないと思われような子どもたちまでもが、この断片的なことばの音だけでわかりあっていることに、驚いたのです。

しかし、じっとみていれば、

「みてごらん、砂がね、いくら入れても、スルスルスルスススるでしょ。やっぱりあたしたちみたいに、おすべりしたいんだね」と、はっきりしたことばで言えるのです。

こんなようすをみると、私たちおとなは、むりにおとなのように話すことを強いてはいけけないのだ。子どもたちは、感動すれば、自然にことばに表現したくなるのだ。ということをしみじみと考えさせられたのです。

だから保育者は子どもが感動するような活動をたくさんあたえなくてはいけない。

こんなことに気付いて、子どもたちを見ると、子どもたちは、体を動かして、

「先生、いま、あたしがグルグルまわったら、ここのまわりも、グルグルまわったの、まねっこだねえ」とか、

「先生、まことくんは、どうしてそんなに大きな目をしてるの、いつでもいつでも、びっくりしてるみたい」と、うたい出したたり、

たなばたのさきかざりを園庭で燃した時、子どもたちは、燃え上がる炎と、けむりをみながら、

もったいないな もったいないな

たなばたもやして もったいないな

ひが たくさん もえたでしょ

けむりがポカポカ けむりがポカポカ

すごくけむって 天までとどけ

あまのがわにもとどくでしょ

と、うたい出し、全員の大合唱になってしまったのです。

経験したことを、ことばに出し、メロディーをつけてうたうたのしさを、学級全体が経験し、表現するよろこびを味わっているのです。

「あたしのうたは、こういうのよ」「ぼく、これでうたができたな」と、感じたことを、すぐうたにしたい出すようになったのです。

こんなことをたのしんでいるうちに、じっと、絵本をみている子どもたちが多くなって来ました。

じっと目をはなさずみつめている頁、さっさと頁をめくって過ぎてしまふところと、いろいろあることに気付いき、じっとみている頁、す通りする頁の調査をしてみました。

○じっとみている頁は、

単純な絵がらのもの、

色が美しく、あたたかい感じのするもの、

まんがふうのゆかいなもの、

一頁の中で話のはじまりから、終りまでが読みとりやすくなっているもの。

○すぐ頁をめくってしまう絵は、

絵がごちゃごちゃしていて、全体の読みとりがしにくいもの、

あまりこまかく、すみずみまでこくめいに描かれているもの、

色のごれた重くるしいもの、

などであることが、ごくわずかの絵本でもわかってきました。

○ひとつのこころみ

男児も女児も親しみやすい絵、動物を題材とした絵をとり上げ

て子どもたちの創意、イメージをたしかめてみることにした。

絵本の二頁（一つの絵で話が作られているもの）

学研よいこのがくしゅう 11月号 第一、二頁

おちばのゆうびん 絵・柿本幸造 作・まどみちお

りすさん りすさん はいゆうびん

かぜが おちばを くばります

くまさん しかさん はい うさちゃん

ゆうびんゆうびん くばります

えはがき ゆうびん ほう きれい

みんな よむまね くばります

この詩を 保育者が三、四回よみ聞かせ、それぞれが気付いたこと、つづきの話を六名のグループごとに、話にまとめてみることを提案してみました。

例①

「くもさんでんぼうですよ。なんてかいてあるのかしら。

あしたあそびにいきましょう。おとうさんは会社をお休みしてください。そしてあかちゃんもつれていきましょう」ってかいてあったの。

例②

「うちに あかんぼが生まれました。おにごっこしてあそびましょう。

でんぼうですよ。おつかいにいってください、林の中のうりやさんに かにに来てください」

などと、自分の生活を語に作りかえていくこと、そして自分たちの生活の中での、望みや経験が、話に作られていくことがわかったのです。

これが、まずまず初歩の段階での話作りであり、子どもたちの素直なイメージであることがわかったのです。

次に、小犬が二匹、でんでん虫が二匹、小犬がでんでん虫をみつめて、ながめている絵(安泰画)ことは、「なんだろう」と一行書いてあるだけの絵本の絵を切り取ってしまい、白の画用紙の台紙にはりつけて、子どもたちの前に出してみました。絵がらが単純なもの、どんな能力の子どもでも何かが読み取れる、動物の画を与えてみたのです。そしてグループでの話作りに誘ってみました。

「どんなお話がかくれているかしら」と呼びかけて、みました。

「小犬がふたりで幼稚園にいこうと思って、歩いていたら、でんでん虫がいたの。でも、ねぼうでまだねているの。そいでね、小犬が、おきなさい、おくれるよっていつてるの。そして、なかなかおきなさいの。こまった小犬はくちでんでん虫をくわえて、せなかの上にポンてのせて、つかまえてるんですよ、って、いつて、

幼稚園につれていったの」と、いうように、これもやはり、自分たちの生活にむすびつけた話になっていったのです。

絵が単純であったために、たのしいイメージにふくれていったようです。

しかし、作者が考えていた、「なんだろう」というイメージは、誰からもでてきませんでした。

このように、おとなの考えと、子どもたちの考えのズレを発見し、子どもたちのイメージのほうが、はるかにゆたかであり、たのしい話に発展していくことがわかったのです。

また、絵のもつ価値のゆたかさが、子どもたちのイメージをゆたかに育ててくれることもわかったのです。

このように、絵のえらび方と、与え方にはいろいろな問題と困難な要素が含まれているのです。

今後、なるべく、数多くの絵を分類し、子どもたちの創造の世界を広げていく手だすけをさぐりあてながら、こころみてみたいと考えています。

一年保育、年長児のまずはじめの段階としては、断片的な、話のはこび、生活的なことがらをたのしむ、自分の生活経験から、一歩も、とに出ることができにくい、などがわかりつつあるのです。

(大田区立蒲田幼稚園)